農田川柳柳新書

へ13
3097
4

へ 13
3097
4
昭和九年
七月二四日
購求

立あがらんとす。彼従者いとく怕るしおりらしく。阿呀と叫びつゝ逃去りぬ。平九郎は彼が物を落さるゝを。いと本意なく思ひ。行ともなく追ふに迹ふつゝく。西の山路を走りぬ。亀鞠は。かゝ劫しく。舊の処へ躍入らんとする。ふ。ひもうけど虚の中より。狩装束したる若人。奮然とゝ跳出足にて揚く礮と就とび。亀鞠は身を轉じく地上ふ倒る。株ふ膳を打せく。息えゝあれど。苦痛を忍びく逃げ走らんとするを。若人ゆゞて襟上ゆ。膝下ゆ布ゝ動せど。この人は是松雅なり。松雅は捷徑より亀鞠が後方ふ出。彼が従者を驚かして間ふ入りく。虚の中ふかくらひ隠ふ假幽昊ありと認く輙くこれを捕りく。その時亀鞠は虫の鳴ごとく声ゝく。怨ゝのゝゝと叫びれば。松雅かゝとうら笑ひ。汝甚膽太し。夫暗さとこそあれ神明あり。明るきところふは王法あり。かく怪しゝを打扮しく

亀鶴ハ山中村の
池の端ふ立在く
假幽霊とあり
往来の人を却て
物をとる人とせふ
忽地松葉九まる
懲さる

人を却さんとて。物を取らんとその謀計あるべし。今人を追ふて麓のうへ走りしい
何ものぞ。なほ対ふ支黨あるべしわれじ。さいへ。告よとこそいはせあら
く責問へば。亀鞭傷り悲びくるゆ殺されぬれば逃るゝ言葉なし。こゝに
滋賀の山里ふ住居せるものゝ。家ハ究く貧さふ。祖母と母と二年以来長た
病ふ打臥しそれハ父なるものも活業をあつかく。又良薬ありといへども。
貯禄なれば用ゐ変うなつぶ。父ハ祖母の為ふ愁ひ。ゆゑ外ハ母の為ふ悲び。
こハ道あつぶとこりながら。近曾此処ふ怪ありといふなつたく。親子夜なく
あのびるく。慢ふ人を驚し。携へられりのハ。ゆゑ落をるなどあれば。拾ひ
薬の代とし。祖母と母を養ひ行り。日今麓へ下りしハこゝへ父ゆ。外ふ相語る
人ハなし。ゆハ寔ふ一且の出来ふよ行り。かくこゝれ行るゝ。いまゝこの外の過を
悔ね。おのれ命ハ助るへくこゝて誠しゆるみゝる。松雅丸つくゝ沙こゝら

おりへ人を却しゝ掠こゝハ古ゆ賊あり。縱親の為ありとも。盗しゝく孝なるんや。
揚香父を救んとゝゝ虎と戦へば。猛虎靡然としく爭つぶ。蔡順母の為ふ
悲を告れば。赤眉の賊もこれを殺さず。故ふ至孝ハ天地を感動を。沙うなこと
こゝ多ハ承と負くくその臭たを説を厭ひ。泥を投るくその汚をいふを諱ひ
あく。親を賣く賊をゝし。なほ賊ありといふ人を憎む。その罪尋常の盗人や
勝れり。今こそおりひきべれといひ懲しく起し。ちどやくその面をうかゝ
ふ。世ふ比なた奴人なるべ。公の中ふ多くむ驚た。人の心ざまどう。貌の醜美ハ
もゝふぶれりのゝこの女子。り冨貴の家ふ麗遇を得く。發跡ゝあん
忽地ふ家をも乱し。国をも亡しく。駿の人の殃を釀さべ。今これを捉
浅の愁ひゝゝきあんふいと尋思し。刀の靭ふまをけるひゝぶいゝ
廷尉ふあゝぶれば。私ふ人を誅さべた理を。只いく懲して久後を誡へ

ゐひ〳〵。腰なれ列卒索とり出く。亀鞠を榎の縣へ縛着墨斗れ
を塗く。まづ彼が額ゑ鬼といふ一字を書写し又左右の脱をまくりあげて
鬼鬼ゑあふど。孝孝ゑ孝ゑ孝ゑ心〳〵真の鬼とおもふ身も
隨〳〵頭なる鬼とおもふん。
と書くぶめく。再び亀鞠ゑ對ひ。これハ吉田少将惟房の嫡子松稚丸し
りゑ潛ずゑ遊山〳〵のかへさるれが汝を殺さんぐら懺悔してゆく
く〳〵れ悪念を起さるなれと説示し。遥ゑ東の方を招たるへ二人の
家隷へ少し〳〵行をあ〳〵く。道次ゑ立立〳〵れが忽地西の山路より走り来るの
件のるを。えもしやり〳〵立を揮ひ。且松稚丸の智勇を稱賛〳〵しまり。
さる行ゑ松稚主従ん。麓を〳〵〳〵ひりゑふはじめ僞て走りる後者も。
途ゑ待あ〳〵〳〵緑由とやゆ且驚と且感〳〵ようみるひとつゑなりて家路

へいそがしゆい〳〵せりれ。さても平九郎盛景ハ。鶴ゑ逃走る人の迹ゑはけくて。
遠〳〵麓へ下臣ゑ。終ゑえしるひ〳〵徒ゑ立えはバ。ゐひもりけど亀鞠ゑ額
ゑ鬼といふ字を書ゑ。いと〳〵榎ゑ縛つけられ〳〵ありしゑ。驚ゑ鞅掌てその
索を解去。さまゞ〳〵勦ゑ〳〵故を問ゑ。亀鞠ハ松稚ゑ嚴〳〵懲られ
緑故を。審ゑ物ぐり。左右の脱を褰〳〵せられバ。平九郎歯を切て。これ今
〳〵へ立かゝる途ゑ〳〵。一人の従者ゑ。滋藤のうゑ猟矢をそえ〳〵〳〵し
又一人の後者が巻ゑ鷹を居さし〳〵。東へ〳〵〳〵れ若人ハ彼松稚なん。
彼が父惟房ゑ。昔総角のころ義と締〳〵。兄第の因えあり。ゐるゑゑが
刃。行盛の子〳〵〳〵。弓矢の家ゑ生れゑ。法師となり果んゑの朽を〳〵
ゑ。殿山を逐電し。かく命運微〳〵。寥〳〵〳〵世を孫〳〵ゑ。彼ハ官職〳〵〳〵
ゑ昇進〳〵。いと時めくも猖〳〵を。剰これが小児の鳥ゑ。愛子成喪

とんと。飽まで恥づかせられぞ恨なる。されり立ぐるの今少早うぜバ彼小冠者を立地ふ。打殺しくまてんのを。ふ〜〜途ふゆさあひなぐら。ちくで過める悔しさよとく。躍おどりく。ちでし罵りく已されバ亀鞠いいく憤ふ堪ぎと。一声叫くいとしくば。平九郎周章くさまぐふ勇くふ。やう立くて甦生くれど。蹴仆されし時。打くれ膳ふくび痛出く。立居も自在ぬ。かくくハ出のより家路ふかくくんこと。えつなしとく。父が肩ふ引うけつ。その夜の明ぐくふ。辛じく西の洞院へ立くりね。ちうとしより亀鞠ハ頻ふ心痛きて。ふくび長さ病著ふうち即くなり。こハみる積惡の報ありとハいひもかしぐ。親子ハ只顧ふ世を憤り人を恨くく。非を改るのてふなし。又くく亀鞠を松稚ふいくく警られくれ憤りのたえく忘くく隙もあふ。ハ。ちバ〜〜歎息しく。ちが年十二分の顔色ハありぐふ。夜光を泥中ふ捨く終ふ玉人ぬあぐぞ。

り命ありく時と威勢を振くくんふ。惟房一家を滅しくくふ恨を散さぐやハおくべきと云とりごち。悪念さくくふ孫増ね。抑女子の美ふして邪智ふくハ。その毒砒霜より甚し。人ふの毒ふ觸くくハ。終ふ死亡を脱ぬとて。宜ある。な兼久の播乱ハ。この亀鞠が三すの香とり起くく。あさましや。後鳥羽院ハ中ともさくふ。中院土御門新院順徳ふる遠さ嶺峯ふ遷されぬひね。只憎ても憎ぐたハ。古今一種の毒婦なり。

忍摠太醉く西洞院と鬬そ

忍摠太ハさくの頃薩陀山ふく危さを脱ぬ。愿哲とともふ伊豆の山家を徘徊しく。長月のはじめふ。武蔵へ立越んとく。相模路ふ出。道とぐふ巷の風俗ハ仮ぐふ。年末鎌倉ふ追捕せくくふ。忍摠太といふ光賊いねる月某日。三河國矢矧ふく。伊庭十郎亂時ふ生拘ぬとくしふ。その夜景江の方

宿に於て乱時主従を欺て殺し。忽地逃亡て往方知れず。鎌倉より
国々へ公文所より下され。家人厳重ありといひ罵るあど。惣太
ぬけ〳〵怪こ。それハさるおぼえなれよ。かゝれ流言〳〵油断さぜ。不意に搦捕ん
とすれの謀計あらん。あれハ鎌倉に往きうね。武蔵に到らんハその弥
に係こ。さハあらねといへ。原哲もげにと諾て。二人ハ途より
取て返し。ふたゝび西を投て走る。年数日に及び。伊賀伊勢の間に且く
躊居て。その年の霜月に。大和路に出て洛に上り。あれ日の暮れよ。
原哲をわて。西洞院なる酒店に到て。半日の醉を盡し。つと走り出る。
主人遽て追めて。こハ酒の費を忘れや行ふいと慢ありと咲けば。
惣太黙頭て。ふハ持あり〳〵れ銭なし。かゝるあく事ふたゝびといひ
けく出んとすを主人引とめて袖に放さず。ハが声音を聞ふ。関東の

人とおぼし。洛に定めて旅なれべし。いづ地に宿りて在て。名告ることを
人に聞つけて奉ることなりやといひもをさざれに。惣太声をあり立て
も怪有る奴ゝ。かゝるれ銭を債らんとて。旅宿を問ことやあるこの民
ゝ。べきなりといたまきは。忽地拳を握て。片頬も側ぶる
礫と打たゝし踏ゆ。動せて。酒保小厠なんどの形勢を見て且
且怒り。主人を救んとて立ちゝ。原哲奮然として押隔小厠に
杖を奮ひとりて。置ゝ酒の瓶を悉く打砕ハ。数十斗の酒かゝれ
ゝ。門に泉を湛へり。惣太ハ呼ふ勃誇て。端近なる火鉢
取て投出ふ。その火障子に飛ちるあど。衆皆いて驚たまゝ。打
て走まる間に。そこ原哲に注目して。いちはやく出去り。むし抱
ことあり。百尋の室も分すの風より焚千丈の坡も一蟻の穴より

惣太ハ鳥羽院の御所と西洞院六角に住ハ

東鑑巻之九五ヵ条ヵ条り又同書同巻ヵ彼御所を四辻殿と称し兼又記されしヵ又百錬抄ヵ元久元年八月八日上皇新御所五辻殿に移徙御幸ありしを載せ四辻五辻とも今ヵの通称あるべし

潰るゝべるうな老幼最心を用ゐ慎おそれをのゝこの災なり。為太お
う悪魔さゝヵ比んヵ物ゆ。さる程ヵ祝融俄頃ヵあれて。一院後鳥羽の御所
も程遠からぬ事急なれば車にそほつれまでもおく吉田少将惟房院
を負たてまつり。殿上人少〻供奉して高倉を東へ御幸なりまゐらせ
ましてや皇妃以下の女官たちハ。おろ〻〻ヵ出ずるヵ。かれ折も平九郎盛景
の女児亀鞠ゑ久〻病て起居も自在なるべきヵ。近隣ヵ祝融の愁ひ
あり〻。いふもぜんとなれば。ぬりこめ葛籠へ亀鞠を入れて楚と脇
負ひ。東の巷を投て遥ヵ脱れ去。中冨小路まで来られ。やゝ葛籠
ゆ扛おろし。一息ぜんとて汗押拭ふ。を愿哲ハ物ありとえて。途よりつけ
まゐり。つと走りかゝる葛籠ゆ。ゆかれ平九郎大ゆ怒り。襟上
掴て引戻し。こハ不敵なる盗賊なり。人も人ゆ。ふるまひを可惜命ゆ。

そと罵り。刀ゆ閃〻つ切ん。とされば愿哲ハ石をうんとうて。ちゝと投
げ。平九郎物もせず。透間もなく切て切れば。なかゝやおりひろん足ヵ信
せて逃走るを。いづ地までと追蒐う。忍の摂太ハ少し後れて。この處を過
れば。路のほとりゆ重なる葛籠のあるゆえ。密ゆ飲び。押ゆ〻〻
負ひ。いとんとて折しもあれ。怨後方ゆ足音〻〻。人影出れハ。序ゆ
かりけること驚き聯絡ゆ葛籠ゆ捨おとして走りこねさても少将惟房。
後鳥羽院ゆ負ひまゐり。からしてこの街まぐまいりしゆ。失火も輙くうち
滅ぶるまで。ちゝまぐれ公卿ハいまぐ追着てまつるぞ。あるりにかゝる〻〻
ゑえさせまゐハ。御迎の御車ゆ待あり。選幸なしまゐ〻せやとて。霎時路傍
ゆ立在く。情由を聞えあげまゐるゆ。院もいと〻走ふして。頻ゆの苦しくおぼ
せ〻べゆずとて。ゆく想んゆ。いづまでゆ〻もおち〻居のゝと仰るゆ。されど一枚の

平九郎盛景ハ
亀翁を葛籠へ
扶入る火難を避く
冨小路まで
まで〻〻折〻も
愿哲葛籠を
奪へんとあふ〻
思ひ太ハ少し
後れ〻この処を
さりける

蔕ごふ〳〵。地を踏せなん〳〵もかしこしいみせまじとおもひあらひ〳〵。
えれハ行のゝ遺けんやうり近う一ッの葛籠あり。このうへおぐ〳〵居まゐらせ
とく。おの〳〵朝服の袖ゆ離断〳〵く葛籠の上ふかく掛させ。こゑを假の裡
らく。ゆゑて其処へおろ〳〵なれい怪ぞし。人あり。とおぼ〳〵く。葛籠の裡ゆく
頻ふ嘆ぶ声を。院ハやゝもにく〳〵。惟房以下の徒大ふ不審こゝく。連忙く抱こ
あげちく〳〵ゝすれとも。忽地御車こゝらとる音ちゝく。ゆえく。月卿雲客
駕御迹を慕ひまゐ〳〵せ。ゆく〳〵ゆく。糸りあひられば。惟房朝臣とるゝ御車へ
うゝ〳〵ゆあせちく〳〵れ。後鳥羽院ハ。目今葛籠の裡ゆく。女子の声せ〳〵。ひと怪
くおぼせ〳〵ぶ。彼何りのゆゝあゝん。ゆ〳〵く裡をゑよと宣ひとれふ。六位の
官人うりゆゝく。件の人を扶出せぶ。年紀二八ばかりなる女子ゆゝ。ひと驚き
なるとゞ。その嬋妍なれ容止ハ。雲の上ふも又比なく美人し。正ふ是富小路

の名ふ負く。亀鞠ハ。費跡ゑゑ時節到来やちゝりまん。一院御車の裡
よりゑをなゝ〳〵。何とな〳〵愛させのひ。惟房朝臣と近く召く。彼ゑゑハ
何りのなりや。その素生を問ゆ〳〵と仰られば。惟房ゆ〳〵よりく。亀鞠ふ對
ひ。彼ハ行の人の女児ゆて。何の故ありゝく〳〵ふゑを捨〳〵れ。緑故を審ふ
ヤスゑ〳〵と答えるふ。亀鞠ハ事の形容をゑく〳〵こゝ尋常の御車まあ
ゝど。り主上ふ申〳〵ゝ。院ゑゝどふく〳〵ゆと召ひく。ちゝ〳〵眼を剣ふて
媚ゆ献〳〵。ゆを地上ふおゑ〳〵ゆ。〳〵ゑ。
父ハ武士の浪人ゆく。原ハ信濃國の住人。仁科二郎平盛遠が族ふ赤石平左衛
盛景とゆのなり。ゑゝ多久〳〵心痛の病ふよりく。起即も自在なく
今宵近隣ふ失火あるとりく。父盛景ゑゝいを葛籠ふ扶入れ。ゑゝ〳〵
く走り出ゝる途中。盗賊ふ出あひぬとおぼ〳〵りけれゑゑ追行や

あはれんたまふ。こえ仕ふ。その折ふ只今人あり。輦の上ふ尻をひ
ゆあらと思へ人の忽地こちら清くちくなりぬ。病頭ふ愈ぬ。惟房
ゆくく寔ふ至尊の玉體ふ布ゑもなれで彼が病の立地ふおとりしとい
故あるうると感激しく。縁由ふ仕へえあげもあるる。一院仰ゆれ
前年ふまりたる。仁科盛遠が族なりとやせば零落せりといふも平人ふ
あくて朕彼女子をこくく捨ひくれおりひあり。汝彼を養ひく姪とし所ふ
まわいせう。このゆふ委んその惟房が妹ふあるもおぼえど。朕ごこ紙を
得ぬ。ふれふ計ふさせよと。密ふ仰く。惟房朝臣眉を頻めこい淡はし。
十善の君とて賤き白拍子ふ。玉體を汙れふ。臣顧思食
ひへ。せりんるとて預りけくく。この日言語紙竭く諫ちれば。院ふ
氣色あしくえさせひく。惟房ふのをうやもとむし白河院ふ賤の女子を

召れく。鍾愛比なくりて。祖國女御是あり。今の女子をそとふ勝てそ。ふく
軒こ嫌ごさあいび且汝養ひく進らせんふ。なぜう世ふ怪れべと再び
諫く事なれと宜ひく。惟房ふ者侍二人を後ふてこくより身の暇ふ
まりり。ゆゑて遷幸ふ。惟房朝臣ふ御所ふ帰りく諫ま
らぐやくく。ちびし車と同送つ。ちまうこ成ひしひ
一院の日来大臣の諫をも聴ぬらぐ。ふ汝仏の隨ふ挙動ふ
惟房ゆゑぐとぶひれも。諫まゆべく。院宜ふちぐひまく
ふ。ちぐさやうもあらんと深念しく。者侍一人をおくめ。今ふもあれちう
女子を尋ふ人あふべ。潛ふ惟房が茅へ紫内せとれぐとゆえおとく。公
一人の者侍ふ。亀鶴ふ扶掖せ。北白川へ帰ゆる。途ふく惟房の家臣
主の迎ふく。ゆいくふ行あひまひ紅ふ。忽地徒者夥ふぐなりくく。

龍鞠とうぐもの
後鳥羽院お思召し
病頓
人々お院その
色お変るひ雑房
お仰く四辻の
御所へ召れ

九　金鷄山を告げ　惟房を陷れ

かくて吉田少將惟房朝臣ハ亀鞠を持て家ふ立入り。班女前ふ院宣の趣を告げ。彼女子をよそふ勅まくと仰せられば。班女前ゆゑて春雨を召て。亀鞠ふ浴さ沐ひ。新衣一襲ゆとり出く。ふるゆを脱ぎえさせ給ふ。是ハ玉ゆ欺く美人ゆく。霞被軽く裝くハ。蹴后新粧ふ倚。金歩静ふ運くた。潘妃舊怨を舒うと怪しきゆ。正ふ是春風一朶の野花ふ折ふて餘香濃ふなりといくぶ。外面如菩薩。内心夜叉。浮屠家の憎も宜なるぞや。

浩処ふ富小路ふ独りぞ出ぬりし青侍。平九郎盛景を誘引く来りしかば。惟房ほゝ入給く對面ありふ。駿の年を經て。面影こそ少し変ぜ。顔ふ変ぜぬもあくぬ行雅ふ見べ。心の中驚き怪くえく言語ハ出しがたくぞ。あふぐ。待しく。その名字を問ふ。平九郎ハ通路青侍が物語ふく。一院亀鞠を召させ給ふ。ほ聊ふ憚る色ふく。伴ひてこふ来りぬ。彼も年ふ主人の仏ゆ猶行雅ふ。ありとは名告ぞ。それ仁科盛遠が族ふ。赤石平九郎盛景とやとりの子ふ。年来関東ふありといくぶも。頼ゆを主もなれば。近曾洛ふのぼりて。西洞院六角の辺ふ住居せり。ふ今舞馬の難ふ。ふて。ふ児亀鞠を葛籠ふ入て。脱ぎて富小路ふ来れる折も。盗賊ふ出あひ。追留んとして其処ふ。ありなのせぞ。灰ふ聞上皇後鳥羽院亀鞠を見そなはして。忽地叡慮ふ稱ひ。彼を御所ふ召るとゆ。ハ盲亀の浮木ふあふよりも。稀なる僥倖なり。偏ふ羽林相公羽林ハ右近衛の唐名の吹挙を仰ぎ。辞爽ふ舒て。ふり。惟房朝臣いとやく盛景ふ。院宣の趣を。ふられて。ゆくび驚て。匿しそなあーかりなんとおぼしく。そなりて亀鞠ゆ養ひ。叔姪の我をとりて

御所へ進ずるとぞ。院宣に兼りたれ首尾を密かに説ませ。まづ休足あるべしとて。家隷栗津六郎。松井源五まで仰せて別室に誘ひ。厚く饗応ひ給ふ。彼六郎源五いとく行雅を謀りたるものどもなれば事の爲体怪しく怪しいかに思ふ。欽ぶべきもあるね行雅九郎密語せば惟房朝臣黙頭く。これもけだめようその人とこそあれ。彼と行雅と云ふ。亡父の志を破て。いかざれば君を敬ふ。かくり。むし先考彼と義を締しく。惟房が覚と嘆せ給ひ。彼人不良の志を抱て。離別遠ふ余に成経く。今又おほけなくも院宣ふ。彼が女児を姪とする。寔ふ因縁なふんり行雅志を改めくゆるび出家いとそふ旧悪を償ふるく。實ふ一家の幸なり。ふのふ所ぶぎぶ。もべての人ふ恥ぶ。これも又彼親子が素生に。班女ふも告ずとぞ宣ひる。されふ。次れ日

四辻殿（後鳥羽院の御所なり）より。亀鞠を召るるまぶくあれば。惟房朝臣已下と得ぜ。こぶらられを伴ひく。院の御所ふ参りふその装ひ美を尽しく。人の耳目を驚せり。院（後鳥羽）ふ珍ひおぼしく惟房ふ夕告と名げ給る。御剣一振を賜ふね。この宝剣長ろふ九寸五分ふく。鞘ふ金の鶏に つけふ。これ。ふの剣を佩くふ人ありく害心を挟めば。鞘の雞忽地声に震も。又その主殺罰の氣をあらはせば。又鞘の鶏声を震さ。こ成りて夕告の名あり。かく奇異ある宝剣なれば。後鳥羽院ふさふ秘義ふ。今度の恩賞とく。惟房朝臣ふ賜ふ。抑この君ハ文武ふ渉猟ふ。御譲位の後も。土御門院順徳院天子二代の間天下の政ハ。ふの一院ふ制度ふ。人ハ。ふ。ふ愛くはーふ。天魔の所爲ふ。御寵愛ふく。後宮の粉黛もこれが爲ふ顔色なしく。

父平九郎盛景と。五位の検非違使ふみされし程ふ。彼親子飽まで君寵ふ
誇て。その威勢肩を差るゝのなしこれ併一院のはからひふよりといへども。
盛景ハ朝敵の子孫とて。還俗亡命の沙門あり。今もてはやされ富貴ふ得
たれども。とゞく惟房の庇ふよれば。忽地先非を悔く。彼人の爲あらぬ誠心と
竭さべたふ。さいはみしく。いめるとて亀鞠が。松稚丸ふ恥しめ懲されしを食
く。親子竊ふ志を合し。惟房一家を滅しく。その所領を押奪んと謀りね。
寔ふ貌ハ人よりく。心ハ獣ゆも劣りといべし。こゝふ又松井源五純則ハ當初
群相を欺き殺せしこゝろより。惟房も彼ハこのゝしげはしとおぼしく。そのゝちを
こゝく用ゐられ。あまたびもなれば。源五ハ恨くく。密ふ野心を
挟こなるべふ。相語るべた人もなりし程ふ。数年黙止しく色ふも出さざりしふ。
亀鞠の父平九郎判官盛景ハ行盛の遺腹子。行雅丸なれ共。

彼親子が。院の御おぼえ他ふ異ふしく。よろづおのが隨なるまゝ驕ぶ。
ゆゑ彼家ふ交加く阿諛ひ。ひのゆみまれ。ぶまなく。ぶえ人命よりかけくらけ
ゆゑ。いと真實なるゆゑ。ふ盛景も。ふのあれば。こゝよりてこゝが
方人なりと思ひく。厚く歎待し。いつも閑談夜とゝあく立ゐ。人さゝ
ちふざりける。今茲ハ既ふ暮くあらむの春立ぬり。四辻殿ふハ院の拝礼朝覲の
行幸おどろかせりふも。亀鞠ハその形勢后妃ふも劣らね
ば。愚なれハ美と賢たハ歎とね。惟房朝臣いと法はしくえて。ちゞく諫を
ぶ。一院こゝく用ゐられ。亀鞠又この序をりく。彼人をあしさまにゝあそ
ふりく。いよ〳〵疎果ひく。君寵忽地ふ衰ぬり。惟房朝臣ハ。諫言容〳〵
ざりをりく。こゝふ讒くことたのしゝ。ある日御所より退りく。只顧ふ嘆
ゝとぞ。亡父の志ふ恃て。且君命ふ違りんこゝふおそれく。亀鞠と進りゝ

とゝれハ。一生涯の過あり。縱今ふ至りて彼親子が素生とゝ申あるとも。一院既に
亀鞠が舌頭ふ惑されておハしませば。實言とハゆゝ召べからんず。嗚呼悲しかな。世の中
これより乱るゝあハ。こゝ惟房が罪なり。所詮亀鞠が命を断て天下の禍を除く。
これ又自害せんふかと。既ふ心を定め。その夜人定て。心中の機密ふて後の事を
さゝ審ふゝん案め。詰朝松稚丸ふ宣ひけれハ。これをきゝ給ハ公務ふ暇なく。又
志く月林寺の阿闍梨を訪ど。又梅稚が安否を問ハ。別ふ叡山ふ登りて。
この一封を阿闍梨ふ進ぜんと仰せられば。松稚丸て涙を拭て。父が書簡を
受とり。従者をゝいて宴しゝ。ゆゝて比叡ふ赴さるゝふ。惟房今ハ心易しゝ
おぼしゝく。恩賜の宝剣ゆゝ告て懐ふかくしまち。衣冠厳ふ装て出給ふ。
松井源五太刀を持て後方ふ従ひ。廊下をとる折しも。怪しいなる主殿の袖
の中ふて。鶏一声鳴ふり。かゝて惟房参内志ふ後源五つゝぐ。そゝ

彼ゆゝ告の宝剣ハ。そのゆゝ殺氣あるゝとゝれハ。鞘の金鶏声を發せんと。
たるふ。今主の懐ふて。鶏の鳴るゝこそ不審なれと。察するとゝ。亀鞠殿父子の威
勢。ゆゝ妬猜。潛ふ刺殺さんとゝ。かの剣を懐ふ志ゝ。ゆゝ兵刃
ゆゝかゝしゝ。院ふ対せば。弑逆の罪いゝでゝ脱れ。生平ふ参内志く。漫ふ院
の御所へ参ゝれば。ゆゝまゝ殺せゝれ以前ふ。中ゝ彼人ふ志ゝとゝ
ゝく。遽しゝく縁由を書写め。公志りゝゝ下郎ふゝしく。赤石平九郎判官盛景
が第へ遣さゝふ。盛景ハ四辻殿へ参る途ふゝ源五が使ふ行あひ。馬上ふて その
書を披ゝて。或ハ驚き或ハ歎ひく。使をゝて通ゝせ。鞭を鳴し
足掻ゝゝやゝく。直ふ一院の御所ふ参り。源吾が密書とゝりく。首尾を亀鞠
ふ志ゝれば。亀鞠ハ怒を復ぶゝ時到ねとて涙ふ笑ゝ。ゆゝて王
生ちゝふゝく。潸然と落涙し。誠中ゝ吉田少将惟房日夫亀鞠父子が

吉田少将惟房
君と諫難く已
ことを得ず竜鞠と
殺さんとすれども
事あらざるして
自害しぬる

君寵他ふ起これを妬猜さ。いかでも短刀を懐ふして。妾を殺んと謀ぬるよ。人ありて告げけりね。君の烏ふ捨つぎ死命ありせべつ。ぬぐりも惜ふ足ぬ。怨ふ人の恨ふ因る。君を驚しをまいんい。罪いとぬ。只速ふ身の暇をとりて。軒漏月を友とせ。舊の住家ふ入させ。とりもあくぞ。泣く轉輾べ一院ぬ。驚ぬ。こハ奇怪なり。惟房刀剣をかくしうちて院参せべ。問ぞして逆心明白ぬ。忽ふ法べ。怒の入こと。えく。赤石平九郎判官盛景ふ。謀を仰せられ。專非常よ使りふ。惟房朝臣ハ機密の漏れをちりあらねべ。朝より退りて。四辻の御所ふ。南面ある。孫廂の下ふ立在く。后町のかくと窺ふ。時あるぞて鶏の声ぞ。亀鞠ハこれを見て。あはその氣をあらはさせ為ふ。何事ぞ。ちりて。袖ふ一面の琵琶を抱き。端ちく立出べ。惟房ハ翠簾をさとかき揚て走り入り。夕告の剣を抜神ぬして跳かとべ。亀鞠ハ。ふりて長琵琶ぬ砕と投つく。物もとど切拂ふ。四の緒ぬ一刀ふ。琵琶ハ左右へ散そう。その隙ふ。亀鞠ハ奥ふ走り躍て。なほ討留んとふり揚る剣の下ふ。盛景つと走よせく。矢庭ふ組伏んとすれを。身を潜めく投退ふ。時ふ合圖や定めん。北面西面の勇士。物の蔭より走り出。右より左より組留。これ生拘んと闘べ。惟房朝臣遂ふ志の遂ずとて。嘲然として長嘆し。ひとし伯邑考。妲己を罵て。醢の刑ふあり。恨ふ君と聖王ふ。こそあるこそ。ぞが忠心却て死後ふ逆臣の汚名ぬのとにんことぬとハもあくぞ。剣を吮ふ衝て。組ふて。ふ死ふ時ふ兼久二年十二月八日。行年四十歳とぞ。この時一院ハ事の形勢を図食て。怒らせ給ハ。惟房ハ重職ふ。ありぬ。御所ふ於く剣戟をふふこと。古今未曾有の椿事

悪虎和漢ふ例さ〳〵は。さも〳〵彼が妻子を搦捕く進〳〵そ〻ぬ。平九郎判官盛景ふ仰さる〻ふ。盛景時を移さん使の廳の官人駿を率て北白川へ馳ゆ〻か〳〵後一院ハ夕告の短刀を更め〳〵亀鞭ふ乗り。この鞭の鶏声ふ殺せ〳〵をりく。沙汰ふ悪るを〻ぬ。故ふ賜る所ありと宣されハ。亀鞭ハ君恩を拝射〳〵てぬと面目ふ於〳〵り

後鳥羽院第一の御子土御門院ハ。建元四年ふ位ゑ出家皇子ふ仁王ふ位ゑ。順徳院これ。ようく後鳥羽院と一院と雖ども上皇へ院を新院とやせ〳〵。

墨田川梅柳新書巻之三畢

白川文庫 書林